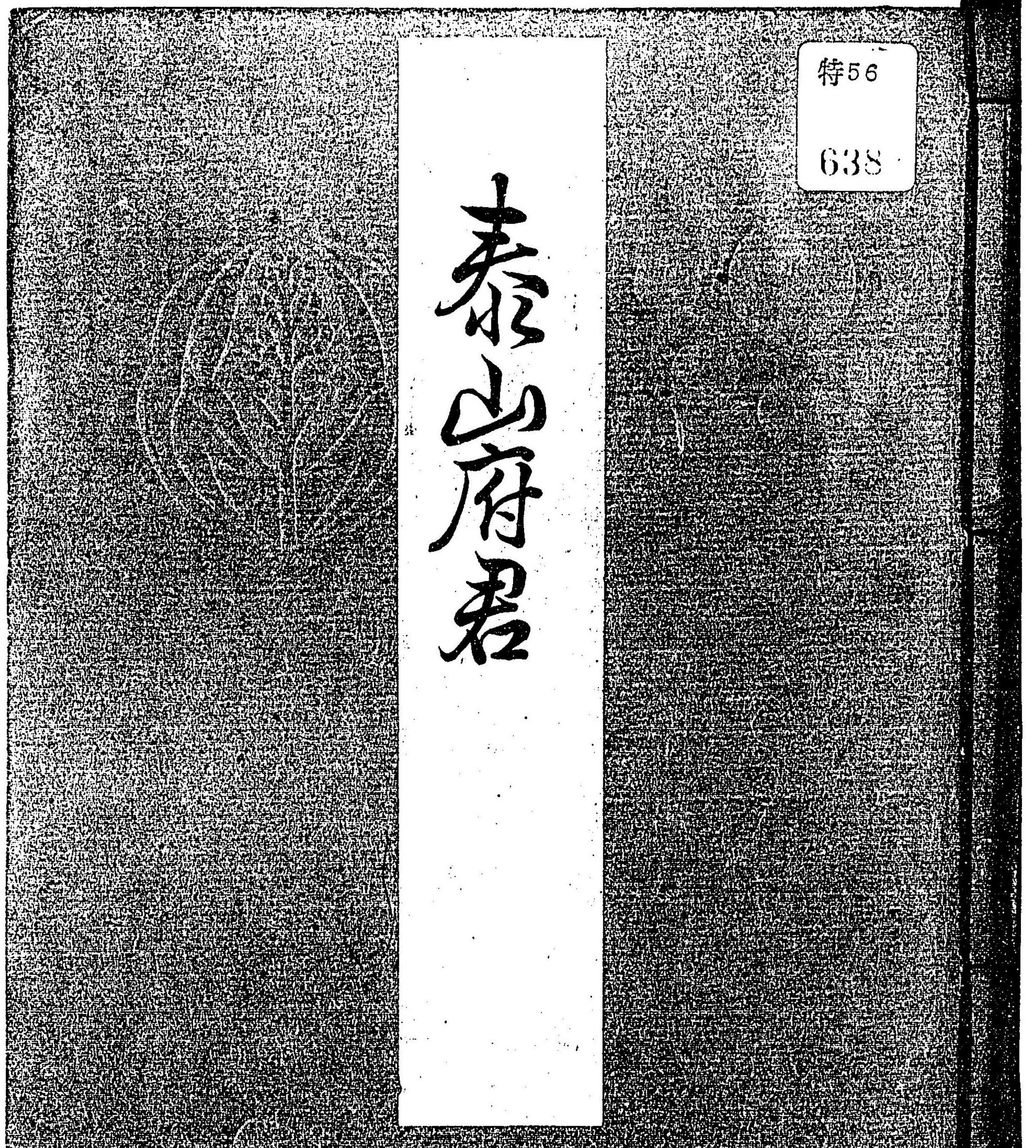


泰山府君

特56
638

泰山府君

我（これ）すなはち人にあくの位ハ陰陽の気
殊にハ花山にハ人目を寄せ松を齢の
知恵不足の道に随みつ寄ハ多くして情義
四方に廻りてきすゝ人を満る方をも延
限も花盛ハ三春ハ不経して唯一七日の

聞なりし勝らふ名所かな惜しくはへハ盛君
以参坊執行は其の命を惜しまれよとなれば
此身種也治まれる代の身ゝ行の空ハ雲海
乃麾の玉旂も数々の車路をも十万との家
花の命をとのへしくぞともみと夕
露の名木終無く咲く花の散るをふ

春の夜の月の光も異ならずしも千金珠
玉のうてなに花の盛は一しほし
花よ鳥よと遊びつゝ雲居の庭や空よりへ錦
天津風雲の通ひ路吹閉ぢよ乙女の姿暫し
とゞめよくら兼つる春の夜のへ光る夜もあらたも
其空所より見るをへ両あ花やいと桜と仁と

散らむ一葉し　嵐も心してや松

に残る白雪の曉夕暮の月も早くも

天の原霞の衣きて[illegible]は如何れの[illegible]

うれしく　行く面白の花盛りや春が一枝好

天上人間如何やと思へ　宴や[illegible]紅

燭[illegible]れ何ぞ花一枝をとられんと思ひし

丑三更れ　春宵一刻價千金花に清

香月に影見えし日惜しき花も[illegible]

惜しむべし　惜しむべしやの花一枝に人望み

我夜遊の客なるは宵く[illegible]稀よ

庭もまた花の下枝花より外は[illegible]し

寒く見えしは春の[illegible]人と告せしとぞの

垣　隔なく月も影さやかに　花の光れ
照らしく　中々由緒は何とも
知らぬ月の夜桜の影清けき哉
実に籬や世を捨て人の　花の袂に
今此松の風通ふそもの縁とも　今
君も一枝の陰の七日を松の風にも成

知らざる人跡もなきにも中々し　空や
吉野の山桜実も千本の花の影　月も
知しも未だ田舎の露の光　花の色　何
と今空にたよるも甲斐なき一枝を天の
羽袖ふる影も月影も共に眺めの空へ
靡きし世も変み給ふ　　[illegible]作

ゆきやのみせて まよ取へまよ役らられば後り
文る枝の花に飛待つまふ 嬉しや見も入
あまりや〳〵 梢をもよ昇られねど其の
下やうふ小世へ驚さしも妙なる花の枝を折取り
や乙めすが天津羽衣立そら遙よ
昇りけるよ〳〵
史
驚っ上 抑是ハ五道の冥官

泰山府君也 我人間の定相を司り也
閇二ツをも擁護する処よ上在まもつかさどり
し花の命をも延へと為 我をも祭る只今
みをむひとをもみすてすとも 験く妙人ハ
道理〳〵 遠雲路を埋しては花の為
を惜しはるゝ 四季月残ゝ〳〵後の世残倚

ず斯る例もありしことぞかし然るハ何
然るを通力を以て絶へたるよ欲界色界
無色界化天色天上もしばらく天下
天の天人ハなりつるか　山河草木震動
して虚空に光満ちて雲　天上信しかと
見る処に何を偸盗の事も上　天は乙女の

衣の花の縵の萎みて　上やうやく
花一時の栄をも悩　簪の花の傷成に
花実の花も中空の雲ハ空へや隠るゝ
らくてんげてんの天人忽服して天女ハ二変
天降りし袖も何も無き此の夢も覚ず
玉濤の雨より散る花を慕ひ行かも

天上にてハ愛染の桜　故にかの枝
に猛きこのほどれ情もしあまと花の齢延永
十王閻魔宮五道の冥官泰山府君の
力ハ桂の継その桜ハ南遊まし奇特の御恵
通力自在の遍満ならまし花の命ハ七
日なれ共本より鬼神に横道あらんや

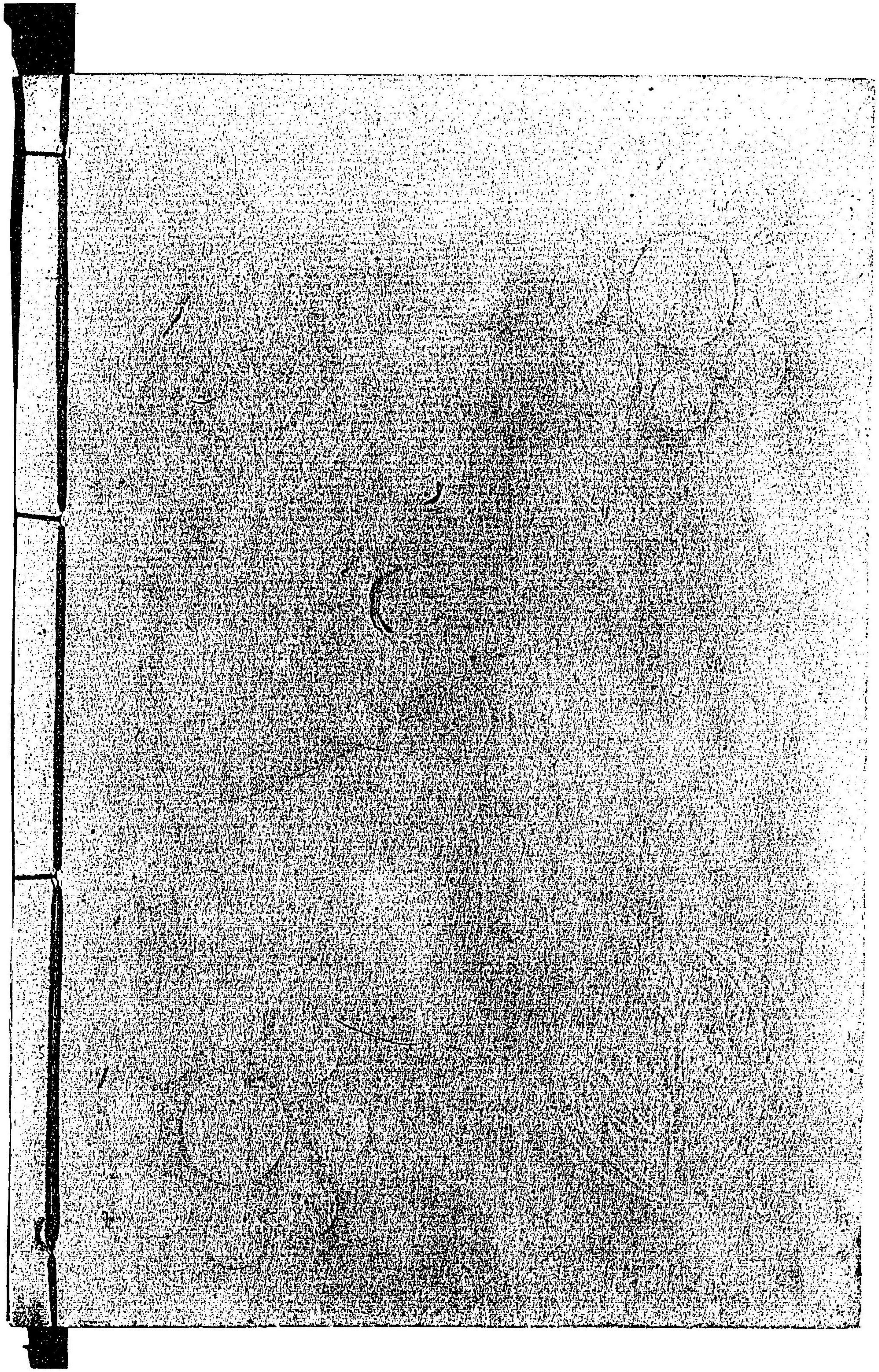
花の梢に飛翔て霞を防き雨を漏らさず
四方に護る例とらんとて七日に限る桜の
盛ハ三七日延ひにけり

明治卅一年四月十二日訂正印刷
同　年四月十九日發行

版權所有

東京市赤阪區青山南町五丁目三番地
訂正者　金剛鈴之助

京都市下京區室町通四條上ル六番戸
訂正者　金剛直喜

京都市上京區二條通御幸町東入一番戸
發行者兼印刷者　檜常之助